

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする第七十三弾

神社本庁再生への道—その三十六

神社本庁問題決着の年に—不祥事が続発し、  
自民党裏金問題が追い討ちする田中—打田体制

昨年十二月四日付「神社新報」

の一面トップ記事は、最初は筆者にとつて腰が抜けそうなものであったが、少し考えて、なるほどそうかと、合点がいった。

記事の見出しは、「神政連青森で公開憲法フォーラム 全国十地区での開催が実現して」

である。神道政治連盟はこれまで、全国で憲法フォーラムを開催しており、その最後となる十回目の青森での模様を紹介する記事であるが、驚いたのは、その内容ではない。自民党安倍派のパーティー券裏金問題はここでは措くとしても、安倍政権の継続を前提として構築されてきた日本会議や神政連などによる憲法改正運動は、第二次安倍政権が幕を閉じた時点で見直しを余儀なくされ、昨年、安倍元総理の命が奪われた時点で振り出しに戻り、現在は再起を期して熟考しているものと考えていた

藤原登(フリーライター)

からだ。しかし、そのような動きが見えないばかりか、安倍政権時代の感覚でまだ憲法改正運動が続いているかのような記事を読んだ。最初は驚いたのであるが、少し考えて合点がいった。ということである。

神政連は今も、憲法改正の運動方針を堅持しているものの、当の神政連自体は、憲法改正が実現するなどは微塵も考えていないのではないか、ということである。

神政連が本当に憲法改正が最重要課題であると考え、その実現を期しているのなら、改正の理念や理由を会長が先頭に立つて自らの言葉で説明すべきであるし、神社新報もただの報告ではなく、関係者や有識者のコメントも併せて掲載するなどしなければ、深みのある報道にはならない。

田中—打田体制の  
巨大な負の遺産

神道政治連盟が大目標に掲げていた憲法改正への取り組みが、前提とする枠組みの崩壊という危機的状況に直面しても、危険対応ができないまま惰性で動いてしまう理由は、組織を動かす構成員に、組織人としての自覚があっても、独立した一人の日本人としての精神、言い換えれば公の精神が確立していないからであると思う。日本国民の立場で大局から物事を考えることが、出来なくなってしまうのである。その原因は前号の繰り返しになるが、政治の負の部分を実際、利権と権力を求めた結果、本来の活動は、「やっける感」だけ醸し出す表面的なものとしてしまったからだ。

神社本庁が抱える様々な課題を、政治的側面から解決するための支援をするという、裏方役に徹すべき神政連が、本来の役割を忘れ、自らの権力構造をもつて神社本庁組織に食い込んだことが過ちの元であった。そして、神社本庁が設立以来、歴代の統理以下の役員が心血を注いできた神社本庁本来のあるべき組織機構を破壊して、自らの利権構造に体よく組み入れてしまったのである。

故に時代の変化から取り残される横領金の使途について、神社本庁による本格的な再調査が始まるようだ。そして、これまでの経緯から考えれば、関係者の目的は、その使途に、神社本庁の常務理事として田中「なほ在任」総長を支える立場にある小野庁長自身が開与していたか否かに集まることであろう。

いからであると思う。日本国民の立場で大局から物事を考えることが、出来なくなってしまうのである。その原因は前号の繰り返しになるが、政治の負の部分を実際、利権と権力を求めた結果、本来の活動は、「やっける感」だけ醸し出す表面的なものとしてしまったからだ。

止まらない神社本庁の  
不祥事

丁度一年前に、東京都神社庁の元職員による横領事件が発覚した。当初、小野貴嗣神社庁長は、腹心である元職員を軽い処分でき済ませようと考えたようであるが、神社本庁の調査で新たな横領が判明するなどしたために解雇され、警察に被害届も出されたという。

さらに奢れるものは、神政連や小野庁長ばかりではない。昨年夏に伊勢市内で開催された神社スカウトの全国大会で、大会幹部らが皇族のご接待という名目で開いた宴席で、常識はずれの浪費をしたため、その支払いをめぐり問題が生じているという話があるのだ。誰が出席しているから支払ったのか、不明な点が多いのだが、事実であることは間違いない。詳細がわからないのは、宴席には田中一派の影がちらついているため、箱口令が敷かれて関係者は口をつぐんでいるというところらしい。

しかし、不祥事がこうも続けば、組織のガバナンス強化どころの話ではない。もはや全国神道人の倫理、道徳のあり方そのものが問われていることを自覚してほしい。今、自民党最大派の安倍派に捜査のメスが入っているが、この世の中に隠し通せるものなどないことを知るべきである。天知る、地知る、我

更には小野庁長をめぐり問題が多いのだが、事実であることは間違いない。詳細がわからないのは、宴席には田中一派の影がちらついているため、箱口令が敷かれて関係者は口をつぐんでいるというところらしい。

藤原登(ふじわらのぼる)

昭和二八年、東京に生まれる。広告代理店勤務の傍ら、歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。